令和　３年１月　８日改１
５９号原稿　　平成２４年１月１８日作成

ホツマの世界

オシヒトは、何故に伊豆雄走り（箱根）で神上りされたか。

吉　田　六　雄

あらすじ

神奈川県の西部には箱根連山がある。最高峰の順にて、神山（千四百三十八メートル）、冠ヶ岳、駒ヶ岳（注一）より構成している。その一角の箱根は日本有数の観光地である。大都市の東京、横浜から一年中、観光客が押し掛けている。その観光の中心は、湯本、大涌谷、小涌谷、芦ノ湖であり、湖畔の箱根神社であろうか。現在の箱根神社の祭神は、「ワカヒト（アマテルカミ）」の孫の「ニニキネ」であるが、ホツマツタヱでは「オシヒト」が、「タ（本人）は箱根・・遂に掘る　伊豆雄走りの　洞穴に、自ら入りて　ハコネカミ（注一）」長弘本(24-48～24-49)と記述されている。

その「オシヒト」の生れは伊勢であり、天日嗣（アマツヒツギ）して政治をされたのは、宮城県の多賀である。それなのに神上りの地は、箱根の「伊豆雄走りの洞穴」である。このことを考えると、「オシヒトは、何故に箱根で神上りされたか」。この疑問が、箱根神社を訪ねる度に疑問になっていた。今回、この疑問の謎解きに挑戦して見た。

また赤坂ホツマ研究会に出席すると、ホツマ暦のスス暦の解読はわかるが、「オシヒト」は何歳まで長生きされたのかとの質問もある。今回、先ずスス暦で「オシヒトの年表」を作成し、更に表中でスス暦⇒西暦に換算して、その西暦より「オシヒトの年齢」を推定して見た。また、「暦は難しい」との意見を少しでも解消するように、「オシヒトの年表」の作成方法、またスス暦⇒西暦への換算方法も併せて、箇条書きにて説明文を追加した。

この結果、計算では４６歳～５９歳（改１）くらいとなり、江戸時代以前と大差ないような寿命であった。

また本文では、オシヒトの呼び名が「オシホミ」「ヲシホミ」「ヲシホミミ」「オシホミミ」「オシヒト」「ハコネカミ」と呼び名が変化しているが、イミナ（実名）は「オシヒト」の一つである。

（注一）遂に掘る　伊豆雄走りの　洞穴に、自ら入りて　ハコネカミ：
「ヰヅオハシリ」は地名ではなく、人名だと理解しています。アマテルカミの崩御の洞は、サルタヒコさんが掘りました。オシホミミさんは、馬の名手である ヰヅオハシリさんが掘りました。だから、駒ケ岳というのです。
「遂に掘る　ヰヅオハシリの　洞穴に、自ら入りて　ハコネカミ」（中川氏）

　また研究者は、箱根連山で「神降り山」の原体験をしていた。「オシヒト君」に関係ないかもしれないが、体験談を綴って見た。

Ⅰ、オシヒトの箱根神

箱根神社

　箱根神。現在の箱根神は、「ニニキネ」と答えるであろう。実際、芦ノ湖湖畔の箱根神社をご参拝すると、ご由緒には呼び名順で、瓊々瓊杵尊、木之花咲姫、彦火火出見となっている。一方、箱根湖畔よりロープーウェイで登ると、駒が岳の頂上に箱根神社の元宮がある。そこのご祭神は、天中主神、高産霊神、神高産霊神、瓊々瓊杵尊、木之花咲姫、彦火火出見となっている。湖畔の前宮と奥宮では共通する神名は、瓊々瓊杵尊、木之花咲姫、彦火火出見である。故に、瓊々瓊杵尊、木之花咲姫、彦火火出見の三神が、箱根神となるようだ。

ハコネカミ

　ホツマツタヱでは、ハコネカミを「オシホミ」、イミナ「オシヒト」としている。ホツマ本文を翻訳すると、「父帝のオシホミは、箱根にて余生を送られていた。その父も子供のテルヒコ（アスカヲキミ）とキヨヒト（ハラヲキミ）に恵まれて幸せであった。

　そしてその帝の清らかな心は国中を照らされ、二人の子供も大きくなられて、ヲキミとして、アスカとハラを（治める）守られて、今、父と箱根で過ごされていた。そんな父帝も死期を悟られて、伊豆雄走りの洞穴に入られて、ハコネカミとなられた。キヨヒトのハラヲキミは、その伊豆雄走りの洞穴を伊豆崎と命名されて、宮を建てて、そこで三年間、喪に服された。

二十四文、九十五～九十九
　タ（父）は箱根　二重恵みぞ
　・・・・・　・・・・・
　天照らす　　日嗣の君と
　守る箱根ぞ
　遂に掘る　　伊豆雄走りの
　洞穴に　　自ら入りて
　ハコネカミ　　・・・・・
　・・・・　　・・・・・
　ハラヲキミ　　伊豆崎宮に
　ハコネカミ　　三年祭りて

日本書紀

「オシホミ」は伊豆雄走り（箱根）にて、神上りされてハコネカミとなられていた。（ホツマツタヱの記述）だが、現在の箱根神社には「オシホミ」が祭られる形跡がない。そのことは平成九年の夏に、箱根の芦ノ湖、桃源郷、箱根大湧谷へと出かけ、箱根神社にお参りした時から気になっていた。そのため、日本史の古典である「日本書紀」より、「オシホミ」の記述を捜して見た。すると、全文の中で僅かに五個所に「オシホミ」のことが記述されていたが、「オシホミ」が神上りされた様子は皆無であった。唯一、「オシホミ」について記述されている点は、《第六段本文》の漢文、「号曰正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊。」の「まさかあかつかちはやひあめのおしほみみのみことの号と言う」と、氏名の紹介だけであった。

このことからも、日本書紀を教本とする神社等があるとすると、「オシホミ」がハコネカミであることを知る手掛かりは、「ホツマツタヱ」以外にはないことになる。そこで、日本書紀の他の「オシホミ」についての記述を紹介すると、簡単に氏名の紹介のみに終始していた。それにしても「忍骨」は、「オシホネ」との読みは、歴代の写本の影響で訛ったか、または、日本書紀の記述が「本物」でないかも知れないと思えた。

《第六段本文》　　号曰正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊。
《第六段一書第一》号正哉吾勝勝速日天忍骨尊。
《第六段一書第二》次正哉吾勝勝速日天忍骨尊。
《第六段一書第三》故因名之、曰勝速日天忍穂耳尊。
《第七段一書第三》而生児正哉吾勝勝速日天忍穂根尊。

松本善之助、オシホミを述ぶ

　ホツマツタヱを昭和の時代に、再発見された松本善之助先生は、箱根神をどのように捉えていたか、先生が発行されていた「月刊ほつま」を検索して見た。すると、三十三号（昭和五十一年十月号）に、「地神五神の神上りの聖地について」の題について論文を発表されていた。次に、その該当する天照大神、オシホミミノ命の個所を、抜粋し紹介して見たいと思う。

天照大神

　地神五神とは云うまでもなく、天照大神、オシホミミノ命、ニニキネノ命、ヒコホホデミノ命、ウガヤフキアハセズノ命の五柱のことだが、・・（中略）・・まず、天照大神だが、この聖地はホツマから推せば、宮津の真名井神社の真名井ヶ原と考えられる・・（後略）・・。

オシホミミノ命

　オシホミミノ命については、記紀ともにその御陵を伝えていない。なぜかといふに、古事記では同命は高天原から葦原ノ中ツ国に降下されず、代わりに御子ニニキネノ命を使わしたとしているからであり、一方、書記ではニニキノ命がタカミムスビノ神の鍾愛によって葦原ノ中ツ国に降されたとし、その父のオシホミミノ命は高天原に居残られたと記す。結局、両書ともに同命は中ツ国に降下されなかつたことになっているから、御陵を伝へないのは当然といふことなのだろう。と松本先生は述べていた。

オシホミの生い立ち（ホツマ）

　一方、ホツマツタヱの記述ではハコネカミは、「オシホミ」「ヲシホミ」「ヲシホミミ」「オシホミミ」「オシヒト」と呼び名は多いが、イミナは「オシヒト」のみである。だが、この「オシヒト」の名前を知っている人は、余程のホツマ通になるであろうか。

　「オシヒト」の経歴を見ると、「オシヒト」の父は、イミナ「ワカヒト」の「アマテルカミ」であり、母は、十二人の御妃の一人であるイミナ「ホノコ」の「セオリツ姫」である。

　そしてオシヒトの生まれは、アマテル神がオモイカネに命じて、都をハラミノ宮より伊勢の伊雑宮に遷した、その伊雑宮の藤岡穴であった。

六文、二十四～二十五

君は都を
遷すさんと　オモイカネして
作らしむ　成りて伊雑（宮）に
宮遷し　ここに居ませは
ムカツ姫　藤岡穴の
オシホ丰に　産ぶ屋のミミ（注二）に
アレませる　ヲシホミの皇子
オシヒトと　イミナお触れて

（注二）ミミ：
ミミの言葉は、出産で母の身と子の身が分かれることを意味し、ここをあえて漢字で当てたいのであれば、身々です。（中川氏）

微笑ましい、ヒルコ姫の子守

藤岡穴で生れた「オシヒト」は、アマテルカミのお姉さんのヒルコ姫に養育される。ここで、「オシヒト」より少し離れて「ヒルコ姫」のことについて、ホツマツタヱ文より説明する。

六文、三十四～三十五

天安河の
ヒルコ姫　皇子オシヒトお
養します

このヒルコ姫に対する研究者の感想であるが、「ホツマツタヱ」の顔と思っている。何故かと云えば、ホツマツタヱの最初の文は、ワカ姫こと、ヒルコ姫の「養育期」の伝承の記述より始まっていることが理由である。

一文、一～二

それ和歌は　ワカ姫の神
捨てられて　拾たと育つ
カナサキの　妻の乳を得て
あわうわや

この伝承と同じ内容は、研究者が生れた頃にも、研究者のお婆さんより聞かされた話と同根であった。一節には、「医者が不足していた昔は、生れた子供

が成人まで育つ確率が低かった。このため、我が子を他人に育ててもらう習慣があった。」この習慣の元になるような伝承の話が、既にホツマツタヱの時代にあり、「ヒルコ姫を一度は捨てて、左大臣のカナサキに育ててもらう」と云う、記述につながったのであろうか。

また幼少期のヒルコ姫は才女であり、「キ（東）ツ（西）サ（南）ネ（北）」の名の故を「カナサキ」に尋ねるなど、天才ぶりを如何なく発揮する。またヒルコ姫は「アチヒコ、ことオモイカネ」に自分より求婚するなど、活発な女性であったことを、ホツマツタヱは記述している。（詳しくはホツマツタヱの本文に譲る。）

世嗣皇子、オシヒト

ワカヒトの治政の御世には、「ソサノヲの斑駒の投げ入れ」「安河の闇と天岩戸」事件、「シラヒト、コクミの事件」、「ハタレの反乱」、それに「ソサノヲの改心」と沢山の出来事があった。この騒動も一段落し治政が安定した頃の「二十五鈴百枝十一穂」頃に、「ワカヒト」より皇子の「オシヒト、ことヲシホミミ」に天日嗣がなされようとしていた。

時は、紀元前２９０頃（改 1）である。その「オシヒト」の天日嗣（アマツヒツギ）の場所は、「日高見の御座の跡」であり、「多賀の国府」であり、現在、比定される場所は、多賀城市の「旧多賀政庁の跡」であろうか。

この「旧多賀政庁の跡」の場所は、東北本線の国府多賀城駅と陸前山王駅を結ぶ三角形の頂点の地点にある。仙台湾や、塩釜湾からは、両方の湾から約五キロの距離の内陸部の高台である。この高台の場所は、昔、多賀政庁の跡であり広大な台地であった。

研究者はこの台地に立って塩釜湾を望んだ時、研究者なりの「疑問」が生じていた。現在の県庁や市役所は、シーサイドと呼ばれる港湾の近くであるが、何故に内陸の高台の地であろうか。（東日本震災の 6 年前に仙台訪問した。）

この高台の答えであるが、ホツマツタヱでは、「日高見の御座」と表現されている。この「御座」は、「高御座」と錯覚しそうな、旧多賀政庁の跡の高台であった。また「ヲシホミミ」の天日嗣を受けた場所は多賀の国府であり、この時に、后となるタクハタチチ姫が、多賀の国府の「ヲシホミミ」の宮に輿入りされた。

十一文、一、～三

二十五鈴　　百枝十一穂に
日高見の　　御座の跡に
また都　　移して名付く
多賀の国府　　・・・・・・
・・・・・　　君は天照る
世嗣皇子

十二文、二

　　アマテル皇子の
ヲシホミミ　　天つ日嗣は
多賀の国府　　タクハタ姫の
宮内入り

ススカ姫は、鈴鹿の「中の洞」で神上りされた

「オシヒト、ことヲシホミミ」と結婚された「タクハタチチ姫」は、十二文で結婚されたと思ったら、十三文では「ヲシホミミ」が亡くなられた後のことが記述されていた。そして、お妃の「タクハタチチ姫」は、皇子の「ヲシホミミ」が、「ハコネのカミ」となられた後、伊雑宮の大神に仕えた。このヲヲンカミの教えは、「鈴明の道」であった。

その鈴明の教えは「生きのうち　欲しおはなるる」「欲しお去る」と、古代人の質素な教えであった。その鈴明の質素な教えの本質について、ツクバウシ（大人）の解説は、「みな捨てて　楽しみまつや」、またカスガ（ワカヒコ、ことアマノコヤネ）は、「捨てず集めず　技を知れ」と述べている。更に「鈴明」の意味は、もっとわかり易くするため、反語を考えて見た。その反語には、「鈴暗」がある。

「財集めて　末（子孫）消ゆる　それ鈴暗ぞ」。このように「鈴明、鈴暗」の意味を考えて来ると、世間の読者達は、自分のことを「何の取り柄もない」が、「鈴明」を率先していると思っているようだ。そんな「鈴明」の名前を賜ったタクハタチチ姫は、ワカヒコに「今聞くスズカ　わがイミナ　君賜れど　訳知らず　また説き給え」と質問していた。

ワカヒコの答えは、「欲しゐを去れば　鈴明なり　財（たから）欲しきは裔消ゆる。」と説いていた。そんなタクハタチチ姫も、後に「伊勢と淡海道の中の洞で神上りされて、ススカのカミ」となられた。

十三文、五十七、八

チチ姫も　　後には伊勢の
大神に　　仕え鈴明の
道を得て　　伊勢と淡海道の
中の洞　　ススカのカミと
ハコネカミ　　向ふイモオセ
欲しお去る　　鈴明の教ゑ
大いなるかな

オシヒトの天日嗣

「日高見の御座の跡」の「多賀の国府」で、タクハタチチ姫と結婚された「オシヒト」は、「ワカヒト」の天君より、世の日嗣をされた。時は、「二十五鈴百三十枝の年サナトの春の初日」の「紀元前３１１年頃（改１）」であった。そして「オシヒト」に天日嗣された「アマテルカミ」は、多賀の国府より伊勢に天下りされたのであった。

十九ーＢ一、Ｂ二

二十五鈴　　百三十枝の
年サナト　　春の初日に
世の日嗣　　皇子オシヒトに
譲りまし　　天より伊勢に
降りいます

皇子クシタマ・ホノアカリ

日高見国の「多賀の国府」に御座す「オシヒト」の代理として「アシハラ」国を治めていた春日殿の「ココトムスビ」が、年老いたので、政りを休みたいとの申し出があった。「オシヒト」は自らが赴いて治めようと考えられたが、それを聞いた日高見の民は、どうしても行かないでくれと押し留めた。「オシヒト」は長子、「クシタマ・ホノアカリ」を代わりに降ろすことにして、伊勢の大御神の許しを得た。(鏑・ホツマツタヱ・３０４頁を引用)。時は「二十六鈴十六枝四十一穂、年キヤヱの弥生」の「紀元前２８０年頃（改１）」であった。

二十文、一～二

　二十六鈴　　十六枝四十一穂
　年キヤヱ　　弥生春日の
　年老いて　　政り休まん
　ことわりに　　天照らします
　オシホミミ　　皇子はクシタマ
　ホノアカリ　　イミナ・テルヒコ
　降さんと

オシヒトの神上り

　「父帝のオシホミは、箱根にて余生を送られていた。・・（中略）・・そんな父帝も死期を悟られて、伊豆雄走りの洞穴に入られて、ハコネカミとなられた。・・（後略）・・。

二十四文、九十五～九十七

　タ（父）は箱根　二重恵みぞ
　・・・・・　・・・・・
　天照らす　　日嗣の君と
　守る箱根ぞ
　遂に掘る　　伊豆雄走りの
　洞穴に　　自ら入りて
　ハコネカミ

オシヒトは、何故に伊豆雄走り（箱根）で神上りされたか。

　今回の研究のテーマとなった、「オシヒト」の神上り地であるが、原稿のテーマを先に決めて、後は、ホツマツタヱを読みながら、原稿を書きながら考えることにした。そのため、ヒントが掴めないため、途中で他のテーマにしようかと思った時期もあった。ただ、他のテーマにしても、自分で設問し答えが、予めわかっている筈がないため、もう一度考え直して、「オシヒト」の神上り地にした。

　「オシヒト」の神上り地のヒントであるが、一つには、「伊豆雄走りの洞穴に」の「洞穴」であった。もう一つには、タクハタチチ姫（スズ姫）が、神上りされた「伊勢と淡海道の　中の洞（注三）　ススカのカミと　ハコネカミ」の文章に隠れていた。この文章は、「タクハタチチ姫」のみを述べていると思いがちであるが、「ススカのカミと　ハコネカミ」の文章の後に、神上り地の鈴鹿と相対する「オシヒトの神上り地」の箱根の地が隠されていると察した。

本文、

	伊勢と淡海道の
中の洞	ススカのカミと
ハコネカミ	

隠文を含む全文

	伊勢と淡海道の
中の洞	ススカのカミと
ハコネカミ	伊勢と日高見の
向かい合う	中の洞穴

このように考えると、「伊豆雄走りの　洞穴に」は「伊勢と日高見の　向かい合う　中の洞穴」と解釈し、文章を追加しても良いようだ。なお、読者で他に意見があり、ご教授戴けると幸甚である。

（注三）伊勢と淡海道の　中の洞

伊勢と淡路の中の洞の位置には、片山神社があります。式内社であるこの神社の現祭神は、ヤマトヒメです。しかし、江戸時代までご祭神は、鈴鹿大権現、鈴鹿御前でした。私はこの神社に検証しにお参りしました。社殿はピッタリ箱根の方角を向いていました。丁度、宮崎県西都市にある妻萬神社が高千穂を向いているように。言うまでもなく、妻萬神社のご祭神は、コノハナサクヤヒメです。私は、あの時の感動を二十年経つ今でも忘れません。（中川氏）

また片山神社は、鈴鹿にあります。鈴鹿峠の近くです。ものすごい山奥です。（中川氏）

神降り山、箱根連山

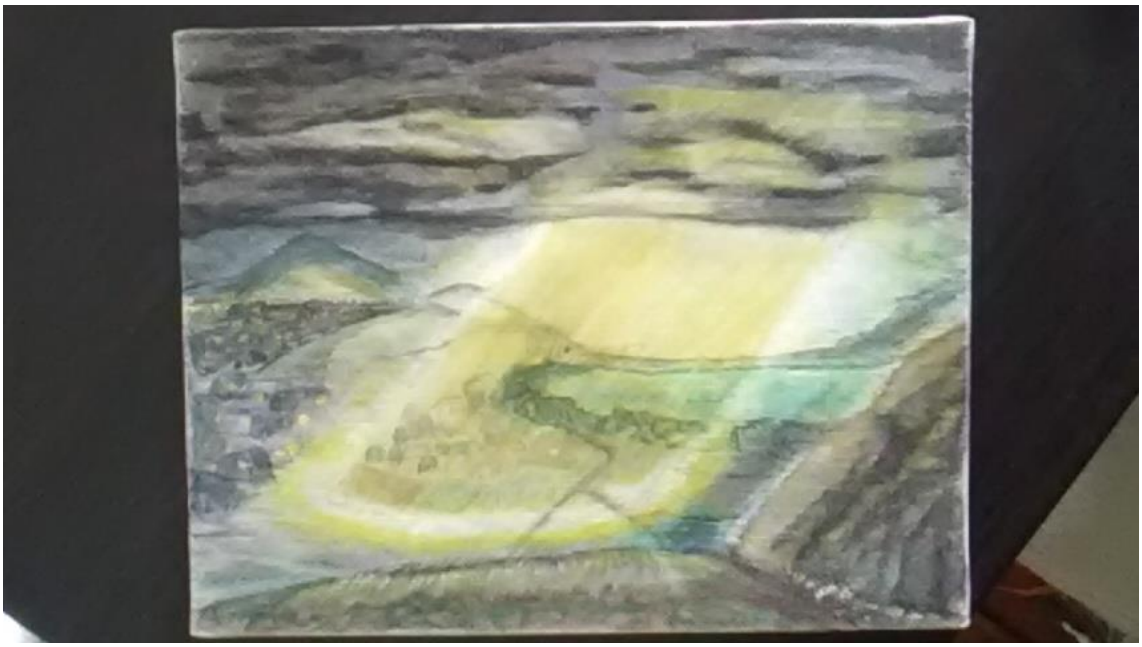
平成九年（1997 年）九月になる。伊豆半島の東海岸にある伊東の会社保養所に出かけた。その帰路の箱根路にて原体験をした。と表現するオーバーであるが、「この箱根の山には、神がいる」と思う光景を目にした。その光景は、午後四時～五時頃だったか、日暮れの山影が長くなってきた頃、愛車にて静岡県道 20 線を十国峠から箱根峠方向に坂道を下っていた時のことである。いくつかの山間のカーブを曲がった後、急に眼下が開けた道なりの風景に面した。

（注四）目にした眼下の向こうに、「黄金色に輝き、あたかも空中に浮いた、海岸沿いの市街の町」があった。その町は、「斜め上より太陽の黄金の光で照らされており、小さく見えるビルや家、家」また「天空一面も黄金色に輝いていた。」研究者は車を降りて呆然としたのは、云うまでもない。

早速、写真に収めようとしたが、十本のフィルムは写真を撮り終えていた。考えた挙句、ビデオを車の電源が届く範囲で、「この光景」を記録した。この時、「神降り山」て、本当にあるのだなあと思いながらも、家族と風景を眺めていた。隣に同じ光景を目にしていた、五十歳くらいの男性が立っていた。

この男性を証人として、ビデオに記録した。また帰宅後、ビデオを再現した所、光源が強かったのか、街並みは映ってなかったが「光景のある光源」が他の風景より浮でていた。そこで、この時の「光景」をスケッチに残した。スケッチしながら、「あの町」は、山の左側に見え、海岸線が湾曲に見えた所から「小田原市街（後に沼津、三島市街と判明）」だったと考えた。詳細は、その時の「ビデオの静止図」と「スケッチ」をご覧下さい。

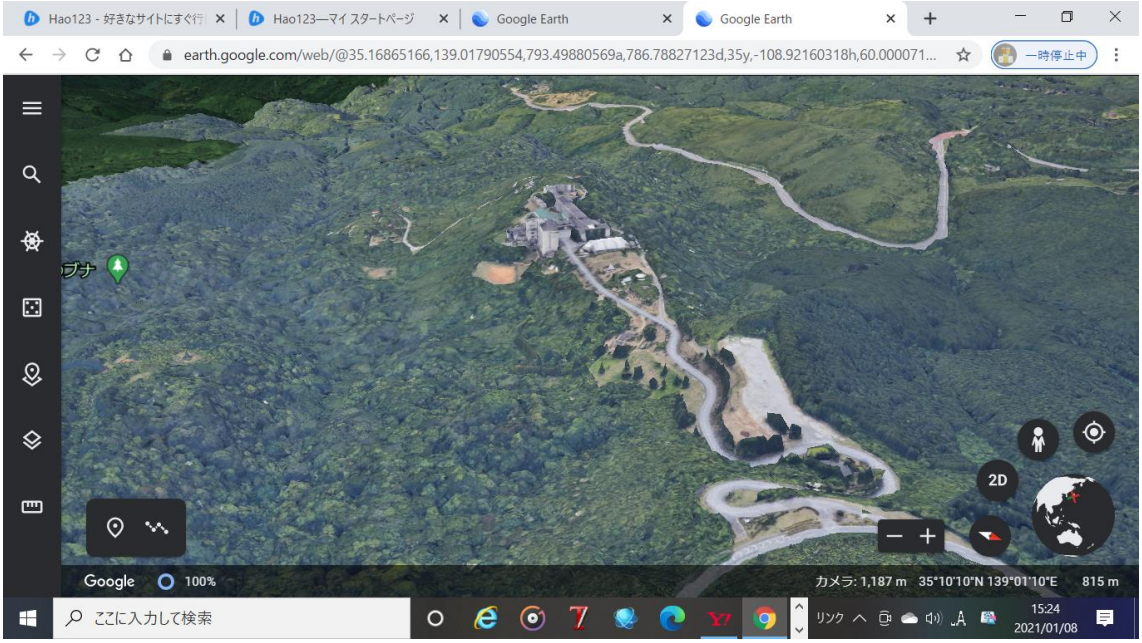
この黄金の風景は、「オシヒト君」の輝きがどうかは、わからないが「箱根連山」に見た「神降り山」の原体験は、その後、体験したことがない。



（注四）御光を確認した場所　　（改 1）

1997 年から 24 年後の 2021 年 1 月に、御光を見た場所を現任しようと思い、当時のビデオを再確認した所、小屋らしい建物が映っていた。箱根町役場に問合わせた結果、富士箱根ランドのスコーレプラザホテルと教えて頂いた。また、眼下に見た市街は、沼津、三島市街と写真付きで教えて頂いた。また、富士箱根ランドのホテルにも連絡し同じように写真付きで教えて頂きました。

富士箱根ランド入り口のバス停、上空より見た写真（googl より）



真ん中に富士箱根ランドのホテルと左奥に沼津、三島市街（ホテル提供）

Ⅱ、ホツマの神々の年代

オシヒト編

オシヒトの御世の年代

「オシヒト」は「ワカヒト」の長子として、伊勢の「伊雑（宮）の藤岡穴」で生れた。そして「オシヒト」に関する記述が少ないが、幼少の頃は「君は弱くて　禊ぎまれ」と記述されており、この記述が、唯一、プライベートの内容であった。成人されて、天日嗣（アマツヒツギ）されて「タクハタチチ姫」をお妃に向かい入れられた「オシヒト」は、宮城の多賀の国府で「政」をされて、後に「伊豆雄走りの洞穴に」にて神上りされた。

このような「オシヒト」であるが、「オシヒト」の神上りされた時の年齢を計算して見ると、４６歳～５９歳（改 1）くらいの範囲になるようだ。研究者の予想は、「君は弱くて　禊ぎまれ」との記述もあったことから、若年で神上りされたのかと思ったが予想が外れていた。

なお、「オシヒト」の生れ年が明確でないため、「オシヒト」が生れた年の前後の「スス暦」の「二十二鈴　五百五枝初」と「二十五鈴　百枝十一穂」を用いて、平均値を算出した。また最大値は、「二十二鈴　五百五枝初」を使用した。

更に、「オシヒト」の神上り年も不明であるが、このため、神上り時の「二十四文」の記述である「時二十九鈴　五百の一枝　三十八（穂）」を使用した。詳細は、「オシヒトの年表（注五）」をご覧下さい。

計算式、（平均値で求めた神上り年齢）改１
　四十六歳、（４６歳）
　式＝前２５７年 ―平均値（（前３１６＋前２９０）÷２）

計算式、（最大値で求めた神上り年齢）改１
　五十九歳、（５９歳）
　式＝前２５７年 ― 最大値（前３１６年）

オシヒトの年表　　（改 1）令和 3 年、2⇒1 倍暦に更新済

ホツマ　文	スス暦、内容	大きい暦 数字	太陽暦	西暦
六文、十四	二十二鈴　五百五枝初に　宮津より	1,286,624	221	-315
六文、二十五	ウブヤノミミニ　アレマセル　ヲシホミノミコ			
十一文、一	二十五鈴　百枝十一穂に　日高見の　御座の跡に	1,442,334	247	-289
十二文、二	アマテルミコノ　ヲシホミミ　アマツヒツギハ　タカノカウ			
十九B文、一	二十五鈴　百三十枝の　年サナト　春の初日に	1,444,181	248	-288
十九B文、一	ヨノヒツギ　ミコオシヒトニ　ユツリマシ			
二十文、一	二十六鈴　十六枝四十一穂　年キヤエ　弥生	1,497,324	257	-279
二十文、二	オシホミミ　ミコハクシタマ　ホノアカリ			
二十四文、六	時二十九鈴　五百の一枝　三十八(穂)如月　朔日	1,706,421	280	-256
二十四文、九十七	ツイニホル　イヅオハシリノ　ホラアナニ　ミツカライリテ　ハコネカミ			
二十八文、一	【スス暦の終焉】　五十鈴の　千枝の二十年　天替わる	2,936,343	385	-151
二十八文、六十七	【スス暦→アスス暦】二十一穂の　キナヱの春は　天二重	-		-150
二十九文、六十七	年サナト　橿原宮の　初年と　御世カンタケの	-		-132

（注六）

（改 1）スス暦、アスス暦の 2⇒1 倍暦への解読の解説については、2019 年 12 月発売の「日本書紀に隠された　古代天皇の秘密～ホツマツタヱで解く～」書籍コード　ISBN978-4-9909679-4-9 C0021 ¥3500E をご覧下さい。

（おわり）

下記は、Web より引用した。

箱根権現

箱根権現（はこねごんげん）は箱根山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神であり、文殊菩薩・弥勒菩薩・観世音菩薩を本地仏とする。神仏分離・廃仏毀釈が行われる以前は、箱根権現社・箱根山東福寺で祀られた。箱根大権現、箱根三所権現とも呼ばれた。

目次

[非表示] 1 概要
2 神仏分離・廃仏毀釈
3 脚注
4 関連項目

概要 [編集]

古代より箱根駒が岳では主峰・神山に対する山岳信仰があった。天平宝字元年（757 年）朝廷の命を受けて、万巻上人が箱根山の山岳信仰を束ねる目的で箱根山に入山し、相模国大早河上湖池水辺で難行苦行の功で三所権現（法躰・俗躰・女躰）を感得した。法躰は三世覚母の文殊菩薩の垂迹、俗躰は当来導師の弥勒菩薩の垂迹、女躰は施無畏者の観世音菩薩の垂迹とされる[1]。台密の影響が大きく、多くの修験者が箱根山に入山して関東の修験霊場として栄えた。箱根権現は伊豆山権現と合わせて二所権現と呼ばれ、鎌倉時代には鶴岡八幡宮に次いで関東武士の信仰を集めた。

神仏分離・廃仏毀釈 [編集]

明治維新の神仏分離令による廃仏毀釈によって、修験道に基づく箱根三所権現は廃された。箱根山東福寺は廃寺に追い込まれ、箱根神社に強制的に改組された。

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AE%B1%E6%A0%B9%E6%A8%A9%E7%8F%BE

箱根神社

別当職

箱根神社は、かつて箱根権現または箱根三所権現と呼ばれ、奈良時代の天平宝字元年（757)、万巻上人が神託により、瓊瓊杵尊・彦火多々見尊・木花咲耶姫命の三神を箱根山より現社地に奉斎し、一社を創建したことに始まる。

古来、駒ヶ岳では主峰・神山を神体山と崇める山岳信仰が行われていたが、奈良・平安時代、仏教と習合しその本地垂迹思想の影響のもと箱根山固有の権現信仰が成立した。とりわけ天台系の密教的信仰の影響は大きく、箱根山を中心に多くの修験者が入峰し、関東における修験通の霊場として発展をみるに至った。

箱根権現は創建時より万巻上人草創の権現社と東福寺とが一体を成しており、いわゆる式外社であったが、朝野の信仰篤く、関東鎮護の古社として崇められた。

社伝によれば、第五十二代嵯峨天皇は弘仁八年（817）勅により駿豆相の三州を寄進、第六十五代花山天皇の時には、皇子豊覚王が第十五代座主職に着任、また鳥羽上皇は当社を崇敬し、酒匂郷四十八町を寄進している。

武家の篤い崇敬を集める

箱根権現の活動が歴史上顕著となるのは平安時代末期から鎌倉時代にかけてのことである。平安時代末期の箱根山別当（東福寺）は行実であった。その父良尊はかねて源為義・義朝父子と親交があったので、義朝の子頼朝が伊豆に流されてくると、頼朝のためにしばしば祈祷などのことを行ったという。治承四年（1180）八月、石橋山の合戦直後、箱根山山中において別当行実は頼朝主従を援助。のち、源頼朝が鎌倉に幕府を開き天下を掌握すると、箱根権現には特別の信仰と保護を加えた。

箱根権現は、伊豆山権現とともに「二所権現」と称せられ、鶴岡八幡宮に次ぐ幕府の準宗祀として将軍家をはじめ幕府御家人の尊崇を集めるとともに、将軍家による社参・奉幣・社領寄進・神馬奉納などに預った。特に将軍自らの箱根・伊豆両所権現への参詣を「二所詣」といい、初代頼朝にはじまり、六代宗尊親王に至るまで将軍家行事として続けられた。またこの時代、『貞永式目』をはじめ武家起請文の神名の筆頭にあげられるほど著しくその神威が高まった。

室町時代には鎌倉府からも崇敬が寄せられ、さらに北条早雲は永正十六年（1519）四千四百六十五貫余の社領を寄せ、以後、北条氏歴代には箱根神社を重んじた。

鎌倉神社の社務は専ら別当が執り、鎌倉期には配下に多数の僧兵を擁して勢

威すこぶる盛大であった。室町初期から中期にかけては、小田原大森氏の一族から出て、別当職を勤めたものが多い。そして、早雲の次子長綱は剃髪して入山し、幻庵と号して別当に昇進した。
　天正十八年（1590）小田原陣の際、兵火に罹って全山が焼亡、文禄三年（1594）徳川家康が朱印領二百石を寄せ、慶長十七年（1612）社殿を復興した。寛文七年（1667）将軍家綱がまた社殿を造営している。　江戸時代、幕府による東海道の整備・関所の設置にともない道中安全を願う人々で賑わい、庶民信仰の聖地としても発展した。

万巻

万巻（まんがん）は奈良時代の僧とされる。万巻上人、萬巻上人などとも呼ばれる。修験道にも精通し、箱根山で箱根三所権現を感得した。

概要［編集］

箕根山縁起によれば、養老年間に京都の沙弥智仁に生まれた男子であり、20 歳で受具剃髪（出家）し、一万巻にも及ぶ経典を呼んだので万巻（萬巻）と称され、日本全国の霊場を巡行した。

天平宝字元年（757 年）朝廷の命を受けて、箱根山の山岳信仰を束ねる目的で箱根山に入山し、相模国大早河上湖池水辺で難行苦行の功で三所権現（法躰・俗躰・女躰）を感得した。これが箱根三所権現の由来である。また、芦ノ湖に住む 9 つの頭を持つ毒龍（九頭龍）が荒れ狂って村民を苦しめていたのを法力で調伏した。調伏された九頭龍は懺悔して宝珠・錫杖・水瓶を持って万巻上人に帰依したので、湖の主・水神（九頭龍権現）として祀った。

天平勝宝元年（749 年）鹿島郡大領中臣連千徳、元宮司中臣鹿島連大宗とともに鹿島神宮寺の建立をした[1]。また、天平宝字 7 年（763 年）多度権現の神託で多度神宮寺を建立した。

鹿島から箱根に向かう途中、海に炎が上がり魚が死んで漁民が苦悩しているのを目撃したので読経をすると、薬師如来が顕われて法力で温泉を海から山に移すように教導したので、37 日間の断食祈祷で実現した。これが熱海温泉の由来とも伝承されている。